

中学校英語教科書を問いを立てながら読む

物語文をクリティカル・リーディングするために

藤本 幸伸

Reading an English text while raising questions about what the text is saying

FUJIMOTO Yukinobu

(Received December 15, 2021)

キーワード：クリティカル（インタラクティブ）・リーディング、問いを立てる、T字型思考法

はじめに

前回「新学習指導要領で中学校英語教科書はどう変わったのか—物語文をクリティカル・リーディングするために」のなかで、学習指導要領の改訂で大幅な増加となった語彙について、かなりの部分が抽象概念を表す語彙であることを確認し、また、リーディング活動では新しいテキストとの向き合い方、受信から発信を促す言語活動が拡充されていることを確認した。ところで、「発信のための読み方に移行するのはよいとしても、英語テキストをどのように読めば、自分の考えを広げ深めていけるのかについては、まだ十分な検討が加えられていない」と課題を残していた。今回は「自分の考えを広め深めていく」読み方について考察していく。

テキストとして、2012（平成24）年まで東京書籍が発行した *New Horizon 2* 掲載のLet's Read 3 “Can Anyone Hear Me?”（pp. 90-93）を使用する。このテキストを使用する理由として、抽象語彙が少なく、物語展開の理解が容易で、しかもゴミの処理という今日の環境問題にも繋げていくことのできる内容だからである。また、このテキストは「基礎セミナー」でも使用したことがあり、学生の中には、単純でわかりやすい物語にこんな意味も潜んでいたのかと感心するものも少なからずいた。これは、この物語をテキストとして使用する有用性が十分であることを示している。

以下、次のような手順で論じていく。テキストをセクションごとに読みながら、物語の広げ方、深め方を実践していく。この作業は、英語教員としてリーディング指導する際の準備にあたる。次に、事前の読みでテキストから広げ深めた内容を生徒にどのように考えさせることができるか、どのような設問が考えられるかを検討していく。概ね各セクションをこの手順で扱っていくが、生徒は本文全体を予め読んでいることを前提としている。

1. “Can Anyone Hear Me?” : 「そもそも」の効用

ここでは、クリティカル・リーディングとは「読み手がテキストとのインタラクティブな活動を介して、必要な情報や知を得る（事から生まれる楽しさを知る）行為」あるいは「テキストに書き込まれた書き手の考えを鵜呑みせずに（批判的に）理解していく知的活動」としておく。ここで言う「インタラクティブ・鵜呑みにしない」とは、テキストが伝えようとしている事柄に「そもそも…とは何か」、「これからどうなるのか」、「なぜそれを、今、問題として取り上げるのか」といった問いを立てることである。

テキストを問いを立てながら読む際に、「そもそも」「それから」「なぜ」という思考支援語が役立つというアイディアは、「世界は誰かの仕事でできている」「この国を、支える人を支えたい」というコピーで有名になったコピーライター梅田悟司のT字型思考法を参考に行っている（92-98）。「なぜ?」「それで?」「本当に?」の3つの言葉からなるT字型思考法は、あるテーマについて、頭に浮かぶ「内なる言

葉」を自在に拡張していくための思考支援方法だという。「なぜ？」は、表面的な内容に始終しがちな自分の考えを掘り下げることに役立つ。「それで？」は、「今考えていることが実現するとしたら、どのような結果を生むか、果たして意味はあるのか」と自分に問いかけることになり、自分の思考を前へと押し出してくれる。「本当に？」は、一つのことをずっと考え近視眼的になりがちな思考を一旦冷却しもとに戻すとともに、新たな方向性を考える余裕を生む効果がある。

梅田の「なぜ？」「それで？」「本当に？」というT字型思考法を参考にしながら、「本当に？」を過去の知識の再検討に振り当てる「そもそも」に変換し、「それで？」は思考を未来へと広げる「それから」に、「なぜ？」は自分の現在の思考を深く掘り下げる「なぜ」に微調整して使っている。「そもそも」「それから」「なぜ」という言葉は、思考を〈現在・過去・未来〉へと自在に拡張する思考支援ツールというわけである。

ところで、クリティカル・リーディングの定義、クリティカル・リーディングとはどのような読み方が知的にわかったとしても、テキストを「鵜呑みせずに」読むことを実践するのは容易ではない。だが、難しいわけではなく、慣れていないことから生まれる実践しにくさと言ってよい。以下、“Can Anyone Hear Me?”のテキストを使って、クリティカル・リーディングを実践していくことにする。

1-1 物語の概要とテキスト

この物語は、ある村の古い神社が嵐で流され、神社のあったところに大きな穴が見つかることから始まる。その深くて暗い大きな穴の周りに村人が集まり覗き込んでいると、村人の一人が穴に向かって「すみません、誰か聞こえますか？」と声をかける。だが、返答はない。好奇心旺盛な男の子が石を穴に投げ込んでも、一向に石が底にあたった音はしない。この「大きな穴」はテレビで取り上げられ、世間の注目を集めることになる。そして、この「大きな穴」をゴミの廃棄場所として使えると見込んだ人物がやってくる。新しい神社建設と引き換えに、この「大きな穴」を譲ってほしいと、村人に持ちかけ、村人はあっさりその提案に乗る。次から次へと「大きな穴」にゴミが捨てられ、おかげで村は発展し、海も空もきれいになっていく。ところが、ある日、空から石が落ちてくる、といった展開である。今日的SDGsにつながる問題、利益を優先し環境や人々への影響を考慮しない企業体質、あるいは伝統継承の難しさなど、今日でも考えるに値するテーマを扱った物語である。その冒頭を読んでおく。

There was an old shrine in a village. One day a storm came and washed the shrine away. The next day people looked for the shrine. But they only found a huge hole in the ground. People looked into the mouth of the hole. It was deep and dark. Someone called into it, “Hello? Can anyone hear me?”

No echo came back.

1-2 物語の敷衍と問いを立てる

なんの変哲もない村に、ある日、突然、世間の注目を集めることになる「大きな穴」が出現する。だが、村人はなぜ神社の下に「大きな穴」があったのかを知らない。それどころか、この神社が伝えてきたであろうこの「大きな穴」の由来やこの「大きな穴」がどのような役割を担ってきたかを、村人は継承していない。過去の伝統との断絶を「大きな穴」の存在は象徴していると言えるだろう。

授業準備段階で、教員がどのようにクリティカル・リーディングすればよいのか、「鵜呑みせずに」読むことの実践を例示しておこう。

日本には、大小合わせて約8万7千の神社がある。読み手にとって、村に神社があるのは何ら不思議なことではない。だが、この何気ない事実を改めて問うていくことから「問いを立てる」読みは始まる。例えば、神社の代わりに、公民館あるいは村役場が流されたとしよう。その場合、普通、人々は次にどのような言動をとるだろうか。公民館や村役場は公共の施設で、無くなると不便であったり、業務が滞ったりするので、新しい公民館や村役場の建て替えの話が持ち上がるに違いない。だが、神社の場合は、単に建て替えればよいというものではない。これまで村を守ってきた神社は、お稲荷さんなのか、あるいは八幡様か、それとも天神様かと、何の神様を祀ってきたのかを確認する必要がある。神社の建て替えに伴い、御神体をあらたに勧請することも検討しなければならない。このように考えると、流された建物が神社であることに意味

があると言えるだろう。

このように物語を読みながら思考を広げていくきっかけを生み出す問いの一つが、「そもそも（神社）とは何か」という問いの立て方だ。「そもそも」という問いで、ある事柄や出来事の由来や定義を確認する作業は、物語や評論を読みながら思考を広げ深めていくことに大いに役立つ。そして、このように「問いを立てながら読む」習慣が身につくことで、自分の感想や意見の形成につなげていくことができる。

さらに、この神社は an old shrine と「古い」神社である。物語といったフィクションや評論といったノンフィクションのいずれの場合も、文章に書き込まれる形容詞や副詞は物語世界の特質や書き手の価値判断を示すので、形容詞や副詞をきっかけに読みを広げたり深めたりできる。形容詞や副詞に注目するとき、反対語や意味の異なる形容詞や副詞を当てはめてみると、なぜその形容詞や副詞がテキストに使われているのかを理解するヒントになる場合が多い。例えば、「古い」の代わりに、「新しい、美しい、立派な、由緒ある、ボロボロの、誰も知らなかった」などを神社の形容詞としてみる。「誰も知らなかった」神社なら、村人にとってその神社は重要ではないので、嵐で流されても村に被害は及ばないだろうと想像できる。また、「新しい」神社であれば、村人皆が相談して新しく建て替えているので、その神社が何を祀ってきたのか、何から村を守ってきたのかを知っているはずだ（伝統継承）と想像できる。このように「問いを立てる」ことを実践していくと、「古い」神社であることが、この物語の今後の展開にとって重要な働き（伏線）となっていることが分かる。

この穴の「大きさ」は、big や large ではなく、huge であることも、物語展開に重要な役割を担っている。huge は extremely large in size, amount or degree という「桁外れの大きさ」を意味する。そんな桁外れに大きい穴が自分たちの村の神社の下にあったとわかれば、誰もが驚きその謂れを知りたくなくなるはずだが、この村人たちは存外に無関心なのだ。そして、その無関心が最後には大きな不幸へとつながっていくことになるという意味で、huge という形容詞も物語展開に大きな関わりを持っている。

1-3 生徒への設問

ところで、授業準備として「問い」を立てながら読む作業と、この「問い」を生徒に行わせることとは分けて考えなければならない。この「古い」神社であることは物語の伏線として機能する。物語を読み終わってから、「ああ、そうだったのか」と気づくことで、その効果が生きてくるので、生徒に物語冒頭で考えさせる必要性は大きくないが、神社に注目させておくのは有効だと思われる。

物語を読み終わった段階で、この物語では神社が大きな役割を担っていると思われるが、「そもそも神社とは何だろうか」と生徒に問いかけて、神社の役割を改めて確認させ、神社の伝統を継承することの大切さ、あるいは伝統墨守とは違う意味での過去への敬意に注意を向けさせることが考えられる。この意味では、「そもそも神社とは何か」という問いは、発展学習に結び付けられるだろう。

2. 「それから」の効用

2-1 物語の概要とテキスト

物語の続きを読んでおく。好奇心旺盛な男の子が石を穴に投げ込んでも、一向に石が底に落ちた音はしない。それほど深い穴だった。やがて村人だけでなく、多くの人々がこの穴のことを話題にしたのだろう、テレビ局がこの穴のことを聞きつけ、この穴をテレビで放映する。すると、多くの人がこの穴を見に村にやってくる。ある日、男がやってきて、「新しい神社を作るので、この穴を譲ってくれませんか」と話を持ちかける。村人たちは、渡りに船とばかりにこの話に乗る。すると、その人物は村の「大きな穴」をゴミ捨て場として広告する。

A boy picked up a stone and threw it into the hole. He listened, but there was no sound.

People heard about the hole on TV. They gathered from all around to see it.

One day a man said to the people of the village, "I'll build a new shrine for you. But you must give me the hole." The people of the village agreed.

The man advertised the hole as a new dump.

2-2 物語の敷衍と問いを立てる

子供は好奇心旺盛なので、新しいことが起きると何かしら行動を起こす。そして、この子供の行動をきっかけに物語は動き始める。深い穴だとしても必ず底があるだろうと予想したのだろう、男の子が石を投げ込んで、石が底に当たるまでの時間で穴の深さを確かめようとした。だが、一向に石が底に当たる気配はない。それほどまでに深い穴ということだ。この男の子の石投げ込み行動を境に、物語は大きく展開し始める。人々は、この深く大きな穴のことを聞きつけ、ひと目見ようと穴に集まってくる。そして、噂が噂を広めていき、テレビがこの穴を報道すると、更に多くの人が集まってくる。

そして、この「大きな穴」の別の可能性に注目する人物が現れる。経済成長し都市に多くの人が集まると、ゴミの問題が生じる。誰も、自分の居住空間の近くにゴミを捨てられたくはない。ゴミを運び込む車の振動は大きいし、生ゴミなら匂いがする。燃えないゴミならば、いつかはその場所もいっぱいになる。何かと厄介なのがゴミ問題だ。都市が発展する限り、経済が成長する限り、様々なゴミや廃棄物が発生し、ゴミを処理する事業が必然的に必要になる。ゴミ処理事業は成長する都市の問題の一つを解決することになるとともに、儲かる事業でもある。そこに、この「大きな穴」の話題が舞い込んできた。村人もその「大きな穴」の謂れを知らないし、使いみちがあるわけでもなさそうだ。村人にとって「役に立たない」大きな穴は、都市のゴミ捨て場として大いに「役に立つ」だろう。神社を新しく建て替える経費を拠出しても、ゴミ捨て場としての「大きな穴」の経済的利益は十分見込めると踏んだ人物が、この村に現れる。そして、村人に「美味しい」話を持ちかけ、ちゃっかりと「大きな穴」を手に入れ、ゴミ処理場として大段的に、おそらく環境に優しく住民にも迷惑のかからないゴミ捨て場として売り込む。

この「大きな穴」がテレビで放映され、それを聞きつけた人々がその「大きな穴」をひと目見ようと、この村に押し寄せてくる。テレビでこの「大きな穴」を報道するのは、この穴が珍しい、希少性があるからだ。今まで見向きされなかった田舎の村が、にわかになら全国的注目を集めるようになる。村の「大きな穴」が全国的に注目されることを、村の人々はどう思っているのだろうか。これを、村の発展の絶好の機会と捉え歓迎する反面、集まってきた人がゴミなどを捨てたり夜遅くまでいたりして村の静穏な生活が崩れるのを嫌がる人も出てくるのではないだろうか。

このように村の将来について、今後どうなるだろうかと未来の姿を推測させる設問を工夫することができる。もちろん、村にとって好ましい未来もあれば、好ましくない未来もある。テキストの明示的に書かれていないことを推測させる設問は、テキストに書かれている情報だけでなく、様々な角度からこの村の未来の姿を考えることになる。つまり、テキストに書かれていることを「鵜呑みにしない」読み方を実践することと同じである。

今までこの村に訪れたことのない人数がこの村にやって来るとなれば、狭い道路が混み合い渋滞が起きるだろう。遠くからやって来た人の中には、この村で食事をした人やここに泊まりたい人も出てくるだろう。そうすると、急遽、食堂や宿泊施設を運営する村人も出てくるだろう。そうだとすれば、村にとってはありがたいビジネスチャンスである。その一方で、車で乗り付ける人の中には、所構わず駐車したり、場合によっては、畑を荒らしたりするものも出てくるかもしれない。人が多くなれば、当然、ゴミや排泄の問題が起きる。決められたところで排泄したりゴミを捨ててくれればいいが、ルールを守らないひとは必ずいるものだ。有名になることで、村の住環境が悪化することが避けられないとすれば、人々が大量にやって来ること、否定的な感情をもつものもでてくるに違いない。

2-3 生徒への設問

このように「これからどのなるのか」あるいは「これからどうするのか」という未来像を推測させる設問は、テキストに書かれていることを多面的に読み取る活動につながる。「そもそも…とは何か」という問いが、過去に焦点を当てて、ある事柄についての一般論や集積された知識の中で、自分の知識や考えがどの位置にあるのかを確かめる作業であるのに対して、「これからどうするのか」という問いは、テキストに書かれている情報をもとに、好ましいものや好ましくないものを含めて、様々な未来像を想像する活動につながる。その意味で、「そもそも」と「それから」は、過去と未来に想像力を広げる格好の問いといえることができる。

【設問例】

1. 小さな村に多くの人々がやって来る。その中に、この村で食事をしたい、宿泊したいという人がいます。みなさんが村の人だとしたら、どのように対応しますか。

2. 小さな村に多くの人がやってくる。その中に、駐車規則やゴミ捨てのルールを守らない人がいたとします。村の環境はどう変わるとおもいますか。みなさんが村の人だとしたら、どのように対応しますか。

3. 「なぜ」の効用

3-1 物語の概要とテキスト

ゴミの処理に困っている人は、この「大きな穴」の所有者にお金を支払ってでも、ゴミを捨てる。お金を支払っても捨てたい成績の悪いテストや人に見られたくないラブレターなどを捨てたくなる。さらに、高い金額を支払えば、普通は捨てられないもの、例えば産業廃棄物や核廃棄物なども躊躇なく捨てることができる。そうなれば、誰もが色んなものをこの「大きな穴」に捨てるようになる。だが、一向にその「大きな穴」は一杯になりそうにない。この「大きな穴」は便利この上ないものだった。完璧なゴミ捨て場を手に入れた人々は、もうゴミ問題について考えることを止めてしまう。

People gave money to the man and dumped many things into the hole. They brought garbage, test papers, old love letters, and so on. Trucks carried industrial waste, nuclear waste, and many other things from far away. Then they dumped everything into the hole.

A few years went by, but the hole did not fill up. It was very convenient. People stopped worrying about garbage because they now had the perfect dump.

3-2 物語の敷衍と問いを立てる

不法投棄すれば、罰金が課される。罰金を支払うより、正当な金額を支払うほうが安いと考えてもおかしくない。また、お金を払うことで、ゴミを捨てることへの罪悪感は消え、心置きなく何でも捨てることができる。下手な捨てかたをすると地域住民と訴訟までに発展しかねない産業廃棄物を捨てることができれば、企業にとっては願ってもないことだ。ましてや、人体への影響がなくなるのに1000年かかると言われる核廃棄物の処理には政府も困っている。その核廃棄物まで捨てることができれば、国家としても一安心だ。何でも捨てることができる「大きな穴」は、ゴミ問題解決の切り札となるだけでなく、ゴミで悪化していた環境も改善する。完璧なゴミ捨て場としての「大きな穴」を発見したこの人物は、都市の成長と人口増加に必然的に伴うゴミ問題の救世主と映ったことだろう。

このようにごみ問題の背景を補完したとき、「なぜこの人物は決して少なくはない神社の建設費と引き換えにしても、「大きな穴」を手に入れたかったのか」という問いを立てることの意義は大きい。この問いを立てることで、この人物の社会情勢分析がいかに鋭く的確であったか、また経済成長で一度快適な生活を手にした人が、その快適さをなかなか手放さないことまでも明らかにすることができるだろう。だが、同時に、都市住民の快適な生活と引き換えに、地方住民にその付けが回ってくるのではないかといったさらなる問いも立てることができる。「そもそも」や「それから」という問いが、ある問題を過去と未来の観点から検討することを可能にする問いの立て方であったのに対し、「なぜ」という問いは、現在の社会情勢や文化状況を深く掘り下げて考えることを可能にする問いの立て方である。

この物語自体は、1950年代後半を背景とするが、今日のSDGsの中の環境問題とも大きく関連する側面がある。例えば、マイクロプラスチックとなって海洋生物に多大な悪影響を与えるプラスチックゴミ問題に当てはめると、この「大きな穴」にプラスチックゴミを無限に捨てることができれば、レジ袋の有料化やストローの紙化などをしなくても構わなくなる。どんどん使ってもゴミ処理に困ることがなければ、おそらく誰もプラスチックゴミに関心を持たないだろう。今、我々が使っているプラスチックの総量とそのゴミ処理にかかる費用を計算すると、新しく神社を建設する経費よりも遥かに大きな金額になるに違いない。例えば、2019年度の日本の廃プラスチック排出量は約850万トンで、このうち海洋プラゴミは2~6万トンである。さらに、環境省は令和3年度海洋プラゴミ対策に約170億円の予算を計上している。このような情報を生徒に予め示した上で、「なぜこの人物は新しい神社建設と引き換えに、「大きな穴」を手に入れようとするのか」あるいは「なぜこの人物は「大きな穴」をゴミ捨て場として広告するのか」という問いを生徒に聞いてみることもできるだろう。

また、形容詞や副詞は、出来事や人の言動に対する書き手の価値判断を示すと上で言ったように、この

セクションの It was very convenient. の convenient という形容詞は、この「大きな穴」にゴミを捨てる人々の価値判断を代弁する。この形容詞を、住民の道徳性を示す good/right/wrong、住民の性格を示す kind/polite/generous、科学技術などの先進性を示す excellent/advanced/sophisticated、経済性を表す profitable/economical/ convenient、住民や環境の安全性を示す safe/secure などの形容詞に置き換えてみると、敢えて convenient と書いている意図がわかってくる。住民の道徳的正しさ (good/right) や寛容さ (generous)、そして安全性 (safe/secure) ではなく、また技術の先進性・洗練さ (advanced/sophisticated) でもなく、経済的利便性や利益を優先した選択であることが強調されている。

さらに言えば、この物語では価値評価を含む形容詞や副詞の使用が、ここまで極力抑えられている。ところが、この場面と次のセクション冒頭で、立て続けに convenient, perfect, clean, beautiful と価値判断を含んだ語やプラスイメージの語が使われる。書き手は意図的にこの場面で価値判断を含んだ形容詞を使い、読み手自身が「大きな穴」にゴミを捨てることの是非を考えるよう促しているようにもみえる。このような書き手の意図や表現効果を探らせる意味で、例えば、It was very convenient. の下線部を、good/wrong/excellent/profitable/safe といった形容詞を選択肢としてあげて、入れ替えさせて、意味がどう変わるかなど、グループでプレゼンさせることも考えられる。また、they now had the perfect dump. の perfect についても、この物語の結末を知ったとき、この形容詞を書き換えるとしたら、何の形容詞にするかを考えさせることもできるだろう。

このセクションの最後の二文の間には、接続語がない。ここも接続語の候補 (as a result/however/in spite of that/anyway) をあげて、どの接続語を選ぶかで、意味が変化するのを確認することもできる。例えば、As a result を補えば、便利さ故に考えることをやめたと解釈できるし、Anyway を選べば、「大きな穴」には確かに便利だが、利便性と思考停止とは直接の関係はないことを匂わせることになることを確認できる。ここでも、書き手があえて接続語を補わずに、文と文の論理解釈を読み手に考えさせるよう促しているところである。

3-3 生徒への設問

【設問例】

1. 物語の登場するビジネスマン風の人物は、新しい神社建設と引き換えに「大きな穴」を手に入れています。その「大きな穴」をゴミ捨て場として宣伝するのはなぜでしょうか。ゴミ捨て場は神社一つ分くらい儲かるのでしょうか。
2. 人々は次々とお金を払って「大きな穴」にゴミを捨てています。親に見られたくないテストとは違って、産業廃棄物や核廃棄物の処理費用は高額になるはずですが。自分なら、産業廃棄物や核廃棄物の処理費用をいくりに設定しますか。
3. It was very convenient. の下線部を、good/wrong/excellent/profitable/safe の形容詞に言い換えましょう。また、自分が選んだ形容詞で意味がどう変わるかを、グループの人に説明してください。
4. It was very convenient. People stopped worrying about garbage because they now had the perfect dump. の二文の間には接続語がありません。as a result/however/in spite of that/anyway の中から接続語を選んで、その接続語を補うと、二文の間の意味がどのようになるかをグループの人に説明してください。

4. 静から動への展開

4-1 物語の概要とテキスト

この「大きな穴」のおかげで、ゴミが海に流れることもなく、大量に燃やされ大気汚染になることもなく、海と空はきれいな美しさを取り戻す。村も豊かになり、町から都市に発展する。ゴミの心配をする必要のない平和な時間が流れていく。ある日、ビルの上で一人の若者が作業していた。すると、空から「すみません、誰か聞こえますか？」という声がどこからともなく聞こえてくる。おやと思った若者は、あたりを見回すが声の主は見当たらない。ただただ青い空が広がるばかりである。その若者は仕事を再開する。やがて空からまた何か落ちてきて、若者が仕事をしている近くの屋根にコツンと当たるが、若者は気づかない。屋根に落ちてきたのは、「あの石」だった。

The sea and sky became clean and beautiful. People built many buildings. The village became a town, and then a city.

One day a young man was working on the roof of a new building. He heard a voice from the sky. "Hello? Can anyone hear me?" it said.

He looked up, but he saw nothing. There was only the blue sky above him. He started working again. Something fell down from the sky and hit the roof near him. But he did not notice.

It was the stone!

4-2 物語の敷衍と問いを立てる

「大きな穴」のおかげで、日本中がゴミ問題を忘れるのに呼応するように、海も空も今までの汚れが嘘のようにきれいな美しさを取り戻し、平和なときが流れる。村も、この「大きな穴」のおかげで、町から市へと、人口規模も予算規模も大きくなっていく。市の発展に伴って、次々とビルが建てられ、もちろん建設に伴うゴミも気にすることはなく、あの「大きな穴」に捨てればいい。すべてが順調に平和に進んでいく。

だが、災いは忘れたころにやってくるものなのだろう。ある日、若者が真新しいビルの上で作業をしていると、どこからともなく声が聞こえてくる。「すみません、誰か聞こえますか？」だ。嵐で流された神社のあとに見つかった「大きな穴」に向かって村人の一人が言った、あの言葉だ。だが、この「すみません、誰か聞こえますか？」という声が、あのと時の言葉だとわかるのは、当時その場にいた村人たちとこの物語を読んでいる読者だけだ。若者がこの声に「あ、あの声だ」といった反応をしていないところを見ると、この若者は、昔、神社のあとに「大きな穴」が見つかったという話を知らないのだろう。以前、神社がなくなって「大きな穴」が見つかったとき、村人たちがこの「大きな穴」について何の伝説も聞き及んでいなかったのと同じように、この声についての経緯を継承していないということだろう。ビルの上で働くひとが、年寄であれば、ひょっとして過去の経緯を噂でも聞き知っているかもしれない。若者であるのは、それほど昔ではないはずの「大きな穴」の話であるにも関わらず、「大きな穴」の継承が行われていないことを象徴的に示すためかもしれない。

空からどこともなく声らしきものが聞こえてくるが、空を見上げて、青い空がのどかに広がるばかりで、不思議なところは何もない。若者は、声らしきものがどこから聞こえてくるのか気にすることもなく、再び作業に戻る。しばらくして、空から石が落ちてくるが、若者は一向に気づく様子はない。この石が、好奇心旺盛な男の子が投げ入れたあの石だと気づくのは、読者だけであろう。これまでもこの物語の面白さとして、この石に the stone と定冠詞がついているところに生徒の注意を向けて、定冠詞の用法とともに、この物語の醍醐味が説明されてきた。そして、「このあとどうなるだろうか」という未来を推測させる設問を工夫するのに絶好の箇所でもあった。

このセクションでは、「そもそも若者はあの「大きな穴」にまつわる話を知っているだろうか」と「そもそも」を使った設問も作れるし、「この石のあと、青い空から何が落ちてくるだろうか」と「それから」を使う設問も工夫できる。さらに、「なぜ若者は、あの声や石についての経緯を知らないのだろうか」と「なぜ」の設問も作れる。

この物語が書かれた、戦後の荒廃を脱するため経済成長を優先し産業公害には目をつむっていた1950年代後半の日本と否応なくSDGsに対応しなければならない2021年の日本とでは、社会情勢が異なるが、「人間本来の豊かさとは何か」について考えなければならないという点では変わらない。田舎の変哲のない村が全国的に有名になったのは、「大きな穴」をテレビが報道したことがきっかけであった。テレビやSNSなどのメディアに注目されることで、平凡な生活が一変し幸せになるという肯定的側面と、不本意に注目され静穏な日常生活が崩れるという否定的側面もある。このような無慮なメディアへの露出が不本意な結果を招くこともあることを考えるきっかけとする活動も考えられる。また、今日の環境問題は貧困や南北問題とも関連している。この「大きな穴」の話題から、今日的SDGsと関連させる活動へと発展させることも考えられる。

4-3 生徒への設問

【設問例】

1. そもそも若者はあの「大きな穴」にまつわる話を知っているだろうか。

2. この石のあと、青い空から何が落ちてくるだろうか。
3. なぜ若者は、あの声や石についての経緯を知らないのだろうか。
4. 田舎のこの村が全国的に有名になったのは、「大きな穴」をテレビが報道したことがきっかけでした。テレビで注目されることで、この村の生活は一変します。生活の変化には好ましい側面と好ましくない側面があります。不幸な結果を招かないようにするには、テレビやSNSに取り上げるとき、どのようなことに気をつけなければならないでしょうか。

おわりに

2012年まで東京書籍が発行していた *New Horizon 2* の “Can Anyone Hear Me?” をセクションごとに読みながら、教員がリーディング指導するにあたって、どのように自分の考えを広げ深めていけばよいのかに焦点を当てた読み方を実践していた。この物語は、語彙や文法事項でほとんど困難な箇所はなく、それ故に、文章内容とその広げ方深め方に傾注できる題材であった。上のような読みが全てというわけではなく、ほかの読み方、別の切り口の読み方もあるだろう。だが、「問いを立てながら読む」ことを実践するには十分であったはずである。教員がまず「問いを立てながら読む」ことの有用性、ひいてはその楽しさを実感できれば、生徒にも「問いを立てながら読む」を実践するようになるのではないかという期待がある。

この「問いを立てながら読む」は、テキストを読みながら、そしてテキストの内容に触発されながら、自分の既存の知識を利用して思考枠を広げ、さらには深めていく読み方である。新しい指導要領では、リーディングは受容活動として位置づけられていない。リーディングは、情報を獲得し、その情報についての確公正な判断を行いつつ、自分の考えを論理的に組み立てて表現するために必須の知的活動である。ある意味、英語リーディングは健全な姿を取り戻しつつある。単語の意味や文法事項を確認すれば、英文を型通りの日本語に訳しさえすれば、それでリーディングはできたという幻想から解き放たれるかもしれないという期待がある。

今回は、生徒への設問を一応あげたにとどまった。次回は、設問の適切性、信頼度や波及性といった観点を取り入れたリーディング活動を検討しておきたい。

参考文献

- 梅田悟司：『「言葉にできる」は武器になる』， 日本経済新聞出版社， 2016.
笠島準一・関典明他：*New Horizon English Course 2*， 東京書籍， 2012.